

Sports

全日本大学バレー 中大18年ぶり

■決勝(2014年12月6日)

中大 3 $\begin{pmatrix} 25-21 \\ 25-17 \\ 29-27 \end{pmatrix}$ 0 日体大

■第67回スーパーカレッジ
男子大学選手権
(2014年12月1~6日)

	相手	結果
1回戦	福井工大	3-0
2回戦	中京大	3-0
3回戦	福山平成大	3-1
準々決勝	東海大	3-0
準決勝	名城大	3-0
決勝	日体大	3-0

1年生が話しやすい雰囲気づくり 手塚主将らが苦慮

バレーボールの全日本大学選手権大会(昨年12月6日、大阪市中央体育館)で中央大学が18年ぶり13度目の優勝を遂げ、大会最多優勝記録を更新。

“バレーの中大”を再び印象付けた。名門復活の陰にあったのは…。

優勝の舞台裏



会心のプレーの手塚主将



表彰ボードを持って、手塚主将はニコリ

準々決勝から決勝までの勝負どころの3試合、いずれもストレート勝ちだった。全6戦で落としたセットは3回戦での1セット。過去17年間、優勝から遠ざかっていたトンネルを抜けると、強くたくましい中大が現れた。大会個人賞表彰では10部門中のべ8人までを占める圧勝だった(別掲)。

勝因はチームプレー、総合力にあった。全日本のメンバーに入ったエース・石川祐希選手、対角線のスパイカー・武智洸史選手、身長203cmのミドル・大竹壱青(いっせい)選手と話題の実力派1年生3人がのびのびとプレー。サーブ、スパイク、レシーブなどに非凡な才能を存分に発揮した。

3年生セッター、関田誠大選手が彼らを巧みなトスワークで操り、要所では4年生・手塚奨(たくす)主将のブロックが完ぺきに決まった。全勝優勝した関東大学春季リーグ戦に続き、中大の強さをまざまざと見せつけた。

レギュラーの半分以上が1年生

中大バレーボール部は昨春、2年連続高校3冠の牽引者、石川と武智両選手を星城高(愛知)から迎えた。元全日本男子コーチ、大竹秀之氏を父にもつ大竹選手も主力として起用された。レギュラー6人のうち3人が1年生。チームは伸び盛りの若い力を全面に出していこうと決めたのだ。

キャプテンが控えに回った。2年生、3年生とレギュラーを張り、さあ最終学年というとき、ベンチウオーマーというのはつらい。

関東大学春季リーグ戦。試合に出場したいという気持ちを胸の奥に押し込み、チームをまとめる。血気盛んな若者になかなかできることではないが、「手塚ならできる」と周囲は気骨ある男と見ていた。こうして中学から始めたバレーボールで自身初のキャプテンに就任した。

主将になって、手塚は東京・東洋高時代を思い出した。

「あのときはコート内外で腹を割って、選手がよく話をしていた」

好プレーは称え、ミスは叱責した。緊張感と集中力が高まったチームは徐々にパワーアップし、ついには2010年3月、全国高校バレーボール選抜優勝大会(通称・春の高校バレー)で28年ぶりに決勝へ進出、ストレート勝ちして初優勝した。セッター関田選手はこのときのメンバーだ。

体得した必勝法を大学でも実践しようとした。幸い大学スポーツは寮生活だ。1部屋を4人で共有する。一緒にいる時間が長い。各学年1人の編成はコミュニケーションの始まりである。寝食を共にして、喜怒哀楽を互いに知る。目を見ただけで、いつしか相手の体調や考えが分かるようになる。

ポジション別の話し合いの機会も多くした。4年生は日常生活から1年生に話しかけ、話を聞いた。下級生

全日本大学バレー 中大18年ぶり優勝の舞台裏



躍動する中大バレー。23番が石川、13番が関田、25番・武智、1番・手塚、2番・江頭、22番・大竹の各選手(写真提供=中大スポーツ新聞部)

が話しやすい環境づくりに腐心した。

こうした雰囲気が1年生をすくすく伸ばした。話題のルーキーといえども、入学してすぐチームに溶け込めるわけではない。潜在能力を引き出したのは主将や4年生らのコミュニケーション推進力だ。

中大を14年間指導しているチームトレーナーの菊池加奈子さんが感心した。

「キャプテンはこの1年間、かなりの我慢をしてくれました。練習でも下級生をしっかり教えて、気の抜けたようなプレーが出ると怒る、チームを締め、よくまとめてくれました」

キャプテン大活躍

全日本大学選手権の出場は、下級生に疲れが見えてチームの戦力が低下。実績と安定感のある主将が立て直しを命じられた。全6試合にフル出場して大暴れ。ミドルのポジションにしては珍しくプレーごとに声をかけた。一つ一つのプレーに称賛し、修正を指示。主将の存在感を大いに示した。

「僕のことより、落とした1セット(3回戦)がなければ…」と悔しがった。ブロック賞のほか、大会で最も

印象に残る選手に贈られるMIP賞に輝いた。

主将は卒業していくが、石川選手は順調に成長し、昨年9月のアジア大会(韓国・仁川)では日本の準優勝に貢献した。同年暮れからはイタリアのプロチーム『モデナバレー』へ短期派遣され、チームのカップ戦優勝にここでも貢献した。大竹選手はアジアカップで全日本メンバーに入った。

中大はインカレ優勝回数を13回として大会最多記録を更新中。下級生に人材を得た中大にますます期待がかかる。

手塚主将は、サッカー日本代表



キャプテン、長谷部誠選手が好きだ。日本中の熱視線を浴びるチームの要。「ボールを持っていないときの長谷部さんの動きをよく見えています」。監督の意向に沿って、誰をどう動かすか。次のプレーを考え、次の次のプレーを模索する。

先のサッカー・アジア杯準々決勝ではPKを外した本田、香川両選手に駆け寄り、言葉をかける。孤立させないように、チームの一員であることを確認する。

テレビを見ながら、長谷部主将に自らをだぶらせる手塚主将。高いレ

ベルの実業団へ進み、プレーを続ける今後が、ますます楽しみだ。9月には12カ国が参加するW杯が予定されている(広島、大阪、東京)。2016年リオデジャネイロ五輪出場権がかかる、最初の予選。手塚主将が腕を鳴らす。

■中大メンバー

背番号	選手名(学年)	ポジション	<得点>			
			ス	ブ	サ	決%
1	手塚(4)	ミドルブロッカー	28	18	2	61
2	江頭(4)	ウイングスパイカー	56	4	1	46
13	関田(3)	セッター	3	6	1	38
22	大竹(1)	ミドルブロッカー	56	15	3	63
23	石川(1)	ウイングスパイカー	81	8	8	60
25	武智(1)	ウイングスパイカー	40	6	6	48
20	伊賀(2)	リベロ	-	-	-	-

(注)得点のスはスパイク、ブはブロック、サはサーブ、決%はスパイク決定率=データ提供・中大スポーツ新聞部

■大会個人賞

最優秀選手賞	石川
MIP	手塚
スパイク賞	大竹
ブロック賞	手塚
サーブ賞	石川
レシーブ賞	武智
セッター賞	関田
リベロ賞	伊賀(以上、中大選手)
ベストスコアラー賞	山田(日体大)
敢闘選手賞	山田(日体大)

■最近10年間の男子優勝校

2005	筑波大
2006	東海大
2007	日体大
2008	日体大
2009	東海大
2010	順天堂大
2011	東海大
2012	筑波大
2013	早大
2014	中大